



家城神社境内の石造物

J R家城駅北東の雲出川南岸に位置する家城神社は、近世以前「諏訪神社」と呼ばれていましたが、明治末期の神社合祀※¹により現在の名称になりました。

境内には、近世以降の石造物が多く見られます。社務所の脇には、宝永3(1706)年銘の水船があり、前面には南家城村の森川氏によって寄進されたことが分かる銘が刻まれています。また、参道の両側には、天保4(1833)年銘の高さ156cmの石灯籠が2基あり、正面には「家内安全」と刻まれています。



水船



参道の石灯籠

家城神社は、明治44(1911)年には本殿が、翌年には社務所が造営され、神社の境内は大幅に拡張されたと考えられています。大正4(1915)年には大正天皇の即位に際し、石灯籠・石橋・鳥居・石柱など、多くの石造物が造られました。さらに昭和3(1928)年には拝殿が、昭和9年には現在の本殿が造営され、家城神社は、ほぼ現在と同じ建物配置となりました。同時にさまざまな石造物も造営されていますが、特に注目すべきは皇居・皇大神宮・橿原神宮・伏見桃山御陵の

遥拝所※²と忠魂碑※³が造られたことです。

このように家城神社境内の石造物を見ることで、近世には村の鎮守であった家城神社に、神社合祀、社殿建設、天皇即位記念の石造物造営、遥拝所・忠魂碑建造という流れから、当時の日本の政治的背景が加味されていく過程を知ることができます。

現在参道には、平成時代に建てられたコンクリートの灯籠が多数あります。さまざまな時代に作られた趣の異なる石造物が立ち並ぶ家城神社を、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

- ※¹ 複数の神社の祭神を一つの神社に合併すること
- ※² 遠く離れた場所に祭られている神仏などを参拝する場所
- ※³ 明治維新以降、戦争などに出征し、死亡した地域出身の兵士のために制作された記念碑



家城神社

